

論文和文要旨

論文題目

現代トルコの「アレヴィー復興」と世俗主義

聖者の町ハジュベクタシュにおける社会関係の民族誌的研究

氏名

今城尚彦

本研究は、1990年代以降のトルコ共和国における「アレヴィー復興」と呼ばれる現象が、共和国の国是である世俗主義との関係においていかなる展開を見せているのかについて、「聖者の町」ハジュベクタシュの社会関係をめぐる民族誌的事例から明らかにするものである。

政治哲学や宗教社会学において、世俗主義は公共領域における平等かつ公平な討議を保障する、リベラル民主主義の基礎として捉えられてきた。しかし人類学において「世俗主義批判」と称される研究潮流は、世俗主義によって拓かれる公共の討議が必ずしも健全なものになるとは限らず、むしろ「排除の空間」にもなりうることを指摘している。

ムスリムが多数派を占め、徹底した西洋化・世俗化によって近代化を達成しようとしたトルコの世俗主義は、欧米の世俗主義とは異なる複雑な様相を呈している。トルコにおいてマイノリティとして差別に晒されてきたアレヴィーの人々は、1990年代に展開した「アレヴィー復興」以降、この世俗主義を全面的に支持することで、マジョリティのスンナ派ムスリムとの平等を獲得しようとしてきた。「アレヴィー復興」とは、トルコにおいて差別や暴力の対象となってきたアレヴィーが、それまで表に出すことのなかった彼らの出自を、政治活動や生活の様々な局面において前景化させ、アレヴィーとして政治的・宗教的に先鋭化する

るようになった現象のことである。このプロセスは政治運動へと発展し、宗教的多数派であるスンナ派ムスリムとの平等を主張する動きにつながった。

序章では、この「アレヴィー復興」に関する先行研究を整理した上で、3つの論点について問題の所在を明らかにした。第一に、「アレヴィー復興」を世俗化と宗教復興の観点から論じる研究は、アレヴィーの伝統は1990年代に始まる「アレヴィー復興」の初期において世俗的な「トルコ文化」として扱われていたが、2000年代になると徐々に「信仰」の側面が強調され、より「宗教的」なものとなされるようになったと論じた。しかしこのような「世俗化」から「宗教復興」へ、という単線的な図式では、「アレヴィー復興」以降に顕著になった宗教性の強調を時代錯誤とみなすような態度を議論の射程に入れることができないという問題が指摘される。

第二に、「アレヴィー復興」を「世俗主義批判」の観点から論じた研究は、「世俗化」に対する「宗教復興」という単線的な構図を乗り越えるものとして注目される。これらの研究では、アレヴィーがトルコの世俗主義の恩恵を受けてきたからこそ、宗教に関する国家の言説に「アレヴィー」という集団範疇のあり方が左右されてきたことが明らかにされている。そこでは、本来曖昧さを伴う「アレヴィー」という集団範疇が、トルコの特殊な世俗主義状況に適應するアレヴィーの戦略的な自己表象の中で、「スンナ派ムスリムの他者」として「宗教的」に定義されるようになったことが、実際の儀礼実践にも影響を及ぼしていると論じられている。しかしこれらの研究は、あくまで国家との関係においてアレヴィーがいかなる自己定義を行うかという議論に終始し、国家に対して「宗教」として位置付けられる「アレヴィー」というカテゴリーが実生活においてどのように適用されているのかという問題については限定的にしか論じていない。この問題点は、アレヴィーの「宗教化」による影響というテーマを扱いながらも、行われる分析が儀礼に用いられる集会所や儀礼そのものの変化、宗教的指導者と信徒の関係の変化といった、「宗教的」なトピックに限定されているということに起因する。

国家との関係において「スンナ派の他者」かつ「宗教」的なものとして定義された「アレヴィー」というカテゴリーを人々がどのように用いているのかを問うためには、無数の文脈を有する日常生活が「アレヴィー」という特定のカテゴリーによって限定される局面において起きていることを見る必要がある。その点で評価できるのが、第三にあげた集団範疇としての出自に着目した研究である。この研究は、「アレヴィー」というカテゴリーを宗教的实践や教義によって個々人をスンナ派かアレヴィーかに二分しようとする議論を、民族誌的事例に基づいて批判している。そこでは個々人がアレヴィーと名乗り、また名指されるための基本的な条件は宗教的实践のあり方ではなく、オジャクと呼ばれる父系出自集団に帰属することであると論じられた。この研究は、国家との関係においては「スンナ派の他者」として「宗教的に」定義される「アレヴィー」が、個々人の実践レベルでは一枚岩でないことを示した点で評価できる。しかし宗教的实践や教義への還元の問題があるのと同様に、出自のような所与の紐帯に基づいて個々人をアレヴィーと同定すること

もまた、新たな還元論への道を開いてしまう。

宗教的実践のあり方だけでなく、出自にも還元しない方法として本研究が採用するのは、日常生活が「アレヴィー」というカテゴリーによって切り取られる際に生じる葛藤や人々の相互行為を、フィールドワークによって捉えるという方法である。

そこで取り上げたのが、ネヴシェヒル県ハジュベクタシュ市である。13世紀の聖者ハジュ・ベクタシュ・ヴェリの名を冠すハジュベクタシュは、アレヴィーにとって最も重要な参詣地の一つとされ、「アレヴィー復興」以降アレヴィーの連帯を象徴する場所となってきた。しかし本研究が強調するのは、ハジュベクタシュの宗教的・政治的重要性のみならず、ここでは人々が日常生活を送っているということである。本研究は、特定の文脈に還元されない日常生活で起きるさまざまな出来事が、「アレヴィー」という限定された文脈に結び付けられるような状況をフィールドワークによって捉えることを目指した。その民族誌的データの分析により、現代トルコの世俗主義と不可分に結びついた「アレヴィー復興」が、人々の生活においてどのように経験されているのかを検討した。

まず第1章においては、本研究のフィールドであるハジュベクタシュが、ベクタシー教団の本拠地からいかにしてアレヴィーの参詣地となっていったかを跡付けた。その後第2章では、町を訪れる人々がどのようにハジュベクタシュを経験しているかについて述べた。「アレヴィー復興」以降の政治を通じ、アレヴィーの儀礼実践においては「伝統」の喪失とも呼べる状況が生まれている。その状況においては人々の個人化された信仰こそがより良い儀礼を実現する唯一の手立てとみなされていることが示された。

第3章では、このような個人化された信仰を重視する姿勢が、ハジュベクタシュの地元住民との間に緊張関係を生んでいることを示した。「アレヴィー復興」以降の政治に巻き込まれているハジュベクタシュにおいては、「スンナ派の他者」として「宗教的」に定義されたアレヴィーリキを内面化した「外から来た人々」と、地元住民である「ハジュベクタシュ人」との間に緊張関係が生じている。

第4章では、このような緊張関係が個人の生活においてどのように経験されているのかについて論じた。ここでは、ハジュベクタシュでアレヴィーの父親とスンナ派の母親の間に生まれ、公的には世俗的な博物館でありアレヴィーにとっては宗教的な参詣地であるハジュ・ベクタシュ・ヴェリ博物館＝廟＝修道場で公務員として働く男性が、「外から来た人々」との関係において抱えてしまう葛藤について分析した。彼の葛藤は、本来単一のカテゴリーに還元できない彼の身の上「アレヴィー」というカテゴリーによって切り取られて理解されてしまうことに起因すると理解することができる。

第5章では、国家との関係において「スンナ派の他者」であり「宗教的」なカテゴリーとされる「アレヴィー」概念が常に持ち込まれるハジュベクタシュにおいて、その枠組みを相対化して生きようとする二人の男性の事例を検討した。第一に挙げるホテル経営者の男

性は、彼が日常的に目にするアレヴィーの参詣者たちがいかに内向きで後ろ向きであるかを批判した上で、非アレヴィーも加入できるという点でより普遍的かつ前向きであると彼が考えるベクタシー教団に加入した。第二に、前章で取り上げた博物館職員の男性も、ハジュベクタシュを「宗教的」な視点からしか見ることのできない人々の眼差しを批判し、より多角的な見方をハジュベクタシュにもたらそうとしている。

このようにハジュベクタシュにおいては、日常生活のさまざまな出来事が「アレヴィー」という特定のカテゴリーに結びつけて解釈される。第6章では、特定のカテゴリーへの還元論に翻弄されるハジュベクタシュにおいて用いられる、「人間になること／であること」「人間性」といった言葉に着目した。事例の分析を通じて、ハジュベクタシュにおいては「人間」という言葉がカテゴリーに基づいた差異や対立を強化してしまうこともあれば、逆にカテゴリーに基づく差異の相対化にも繋がっていたことを示した。

本稿を通じて、「アレヴィー復興」以降の政治に起因する緊張関係がハジュベクタシュにおいて見られることを論じてきた。終章では、このことを改めて世俗主義との関係で考察した。ハジュベクタシュに集まるアレヴィーとして先鋭化した人々と、ハジュベクタシュの地元住民との間の緊張関係は、「宗教復興」に対する「世俗化」の残滓という対立関係としては捉えられない。一方「世俗主義批判」の視点から見ると、「外から来た人々」の宗教的・政治的に先鋭化した振る舞いは、国家の恣意的な世俗主義の運用に対する対抗的政治に位置付けられる。ここにおいて、本来は曖昧さを含む「アレヴィーリキ」は、「スンナ派ムスリムの他者」として「宗教的」に定義される。その結果、ハジュベクタシュに住むアレヴィー出自の人々や町そのものが、狭く定義された「アレヴィー」というカテゴリーに還元されて語られるという状況が生じている。本稿において検討してきた民族誌的事例は、そうした状況の中で人々が翻弄され、葛藤し、対立を深めていることを示すものであった。

さらには、カテゴリーを相対化することによって潜在的対立を回避しようとする動きも見られる。このような相対化の姿勢がアレヴィーと世俗主義の関係をどのように変えていくのかについては、今後も継続的な調査に基づいて検討を重ねる必要がある。